論文審査の結果の要旨

報告番号	乙 第　3188　号	氏 名	永井　努
論文審査担当者	主査　　木内　祐二　教授 副査　　砂川　正隆　教授 副査　　稲本　淳子　教授		

論文題名：Identification of factors associated with the efficacy of atomoxetine in adult attention-deficit/hyperactivity disorder.
（成人注意欠如・多動症（ADHD）に対するアトモキセチンの有効性関連因子の探索）
掲載雑誌名：Neuropsychopharmacology Reports　2022 年　掲載予定

アトモキセチン（ATX）は非中枢性刺激薬であり、成人の注意欠如/多動性障害（ADHD）の標準的治療薬である。ATX の長期有効性（6 か月）は約 40%であり、有効性には個体差が大きく、患者固有の要因が関係していると考えられるが、詳細な報告はない。

本論文では ATX の有効性に関連する因子を検討した。ATX を初回導入した 18 歳以上の ADHD 患者 147 名を対象とした。アウトカムは治療成功（6 か月以上治療が維持され、症状の改善を認める）とし、症状の評価は症状の改善度に関する専門医の評価から総合的な判断とした。対象患者の 103 名（70.1%）がアウトカムを達成した。

ロジスティック回帰分析により、ATX の最大投与量とギャンブル嗜好が有効性に関連する因子として同定された。ATX の漸増過程における最大投与量が多いことが、高い有効性に寄与することが示唆された。ギャンブル嗜好は ADHD の中核症状の衝動性の存在を示している可能性が考えられた。

本研究は ATX の処方に際して、ギャンブル嗜好の有無を指標として患者個々への適応を判断することで、成人 ADHD の薬物療法の個別化を促進し得ることを示唆するものであり、成人 ADHD の適切な薬物療法への貴重な知見を提供するものと考えられた。

以上のことから、本論文は本学大学院学位論文(博士)審査基準を満たしており、学位論文に値すると判断した。

（主査が記載）